

〔論 文〕

キャンプ実習が大学生のコミュニケーションスキル 及び社会人基礎力に及ぼす効果に関する研究

林 直也*¹、佐藤博信*²、溝畑 潤*¹

I. 緒言と目的

近年、我が国における大学生の中途退学率が増加傾向にある（文部科学省、2014）。「経済的理由」が中途退学の最大の要因ではあるものの、「学校生活不適応」を理由に中途退学に至るケースも散見される。不適応問題として、学業意欲の減退、授業欠席、不登校、引きこもりなどが指摘されているが（小柳、1996）、これらの問題は、近年報告されている対人緊張不安の強い学生や友人が作れないと訴える学生の増加（一宮ら、2003）と無関係ではなく、さらに、西田ら（2009）が指摘する一時的で浅く安易な人間関係を築くことを得意とする大学生の特徴もそれらに影響していると思われる。こういった希薄なコミュニケーションを基盤とした人間関係の構築は、結果として「人とうまくつきあえない」、「人の噂が気になる」、「無気力」などといった、様々な心の問題を抱えている学生を増やすことにつながっていく（文部科学省、2000）。このような問題の原因の一つに社会的スキルの欠如が指摘されている（松元、1996）。社会的スキルとは、人付き合いのスキルであり、人間関係の円滑な形成や維持に必要とされる技能である。その社会的スキルのうち、青少年に特に不足しており、その獲得が重要だとされているスキルにコミュニケーションスキルがある（杉山、2008）。コミュニケーションスキルとは、その名の通りコミュニケーションを円滑に行うために必要となるもの（藤本ら、

2007）であるが、このスキルの獲得が、学業意欲の減退、不登校、引きこもりといった学校生活不適応問題の解決にとって不可欠である。

一方、大学在学中の問題だけでなく、近年では新卒者の早期離職も問題となっている。厚生労働省の「学歴別卒業後3年以内離職率の推移」（厚生労働省、2017）によると、大卒者が3年以内で離職する割合は1995年以降30%を超えており（2009年のみ28.8%）、特に大卒1年目の離職率は、1987年の調査開始以降続けて大卒2年目、3年目よりも高い割合となっている。これらの理由として、「労働時間・休日・休暇の条件がよくなかった」、「人間関係がよくなかった」、「仕事が自分に合わない」、「賃金の条件がよくなかった」等が厚生労働省の調査（厚生労働省、2013）によって導かれているものの、職場や地域社会で必要とされる能力の不足、基礎学力だけでなくコミュニケーション能力や問題解決能力の低下等を指摘する声もある。そのため、多くの企業において採用のミスマッチや入社後の教育に頭を悩ませているのが現状である（株式会社アイ・イー・シー 2018年8月29日アクセス）。

これらの解決策が模索される中、2006年、経済産業省によって社会人基礎力が提唱された。これにより、企業の人事評価、特に新卒採用現場で社会人基礎力が重要視されるようになった。社会人基礎力は、「前に踏み出す力（アクション）」、「考え抜く力（シンキング）」、「チームで働く力（チームワーク）」の3つの能力で構成され、「職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事をし

キーワード：野外教育、コミュニケーションスキル、社会人基礎力

*1 関西学院大学人間福祉学部教授

*2 関西学院大学人間福祉学部准教授

ていくために必要な基礎的な力」とされている(経済産業省、2020年1月8日アクセス)。前に踏み出す能力は「主体性」「働きかけ力」「実行力」、考え抜く力は「課題発見力」「計画力」「創造力」、チームで働く力は「発信力」「傾聴力」「柔軟性」「情況把握力」「規律性」「ストレスコントロール力」からそれぞれ構成されている。今後、企業が新卒学生に求める人材の能力と大学の人材育成方針の不適合の解消や新卒者の早期離職問題の解消のためにも社会人基礎力育成は重要課題であるが、社会に出る前に社会人基礎力を身に付ける機会が減少(株式会社進研アド、2007)している中、大学における社会人基礎力を育成する教育プログラムの重要性は日々増してきていると言える。

以上のことから、現代の大学生において、コミュニケーションスキルならびに社会人基礎力の習得は種々の問題解決に不可欠な要素であると言える。そこで、本研究ではこれら能力の習得に野外教育が及ぼす影響に関して検証を試みる。

先行研究を概観すると、社会人基礎力を育成するためのインターンシップやインターンシップの事前研修に着目した研究(真鍋、2010; 深津、2012; 津田ら、2016)、就業体験が社会人基礎力やコミュニケーションスキルに及ぼす影響に関する研究(甲斐ら、2015)、ラーニングコモンズの活動が社会人基礎力に与える効果に関する研究(山田ら、2017)、通常の体育実技授業が社会人基礎力にもたらす効果を検討した研究(石堂ら、2016; 引原ら、2016)、体育実技授業を履修する学生の社会人基礎力の特徴を明らかにした研究(石堂ら、2015)、大学キャンプ実習が社会人基礎力に及ぼす効果に関する研究(青木ら、2012; 築山ら、2008)、自然体験活動が大学生の社会人基礎力に及ぼす影響に関する研究(徳田ら、2017)、キャンプ活動が子供の生きる力に及ぼす影響に関する研究(橋ら、2003; 花田ら、2005; 中川ら、2005)、大学体育授業や組織キャンプがライフスキルの獲得に与える影響に関する研究(東海林ら、2012; 高山、2009)、大学体育授業において人間関係が醸成されるかどうかを検証した研究(橋本、2009; 渋谷ら、2003)、体育授業を通じた学生のコミュニケーションスキルの変化とその向

上プロセス解明に関する研究(杉山、2008)、大学体育実技やキャンプ授業が学生の自己概念や孤独感、信頼感等に及ぼす影響に関する研究(影山ら、2001; 山田ら、2010)、野外活動が小学生の自己効力感に及ぼす影響に関する研究(織田ら、2017)、体育実技が学生の社会的スキル向上に及ぼす影響に関する研究(野口ら、2013; 西田ら、2009; 野口ら、2015)等がある。これらの研究結果より、大学体育授業やキャンプ実習によって様々な教育効果があることが分かる。しかしながら、築山ら(2008)の研究は、測定尺度や調査方法の課題により、納得できる結果に至らなかったことが述べられているし、青木ら(2012)の研究はキャンプ実習による社会人基礎力の向上を明らかにしたものであるが、論文の中で、「お互いに顔見知りであったり、既に人間関係ができていた班もあったことから、初めて会う人同士の関係に比べると対人関係的にも大きな負荷にはならず、新たな人間関係を創るために自分から積極的に働きかける機会もほとんどなかったのではないか」という課題が述べられている。また、徳田ら(2017)、築山ら(2008)、青木ら(2012)の研究はともに3泊4日の実習を対象とした効果検証となっている。そして、杉山(2008)の研究や橋本(2009)の研究において、スポーツ活動場面でのコミュニケーションの変化の可能性が示されているが、野外教育を対象としたものではない。また、高山(2009)の研究において、組織キャンプ参加による他者関係やコミュニケーションなどの社会的スキルの向上が明らかにされているものの、使用されている測定尺度は、谷井ら(2001)が開発した小中学生を対象とした尺度を大学生用に加筆修正したものである。

これらのことを踏まえ、本研究では、大学体育授業における2泊3日の野外教育(キャンプ実習)受講生を対象とし、キャンプ実習が大学生のコミュニケーションスキルならびに社会人基礎力に与える効果を明らかにする。対象者(詳細は後述)は、実習前にアイスブレイクやチームビルディング等を経験していない学生であり、これらの学生のコミュニケーションスキル、社会人基礎力が先行研究よりも期間の短い2泊3日という実習の中でどう変化するのか。これを明らかにするこ

とで、キャンプ実習がその低下や不足を指摘されているコミュニケーションスキル、習得が必須である社会人基礎力を向上させる教育効果を持った存在であるかどうかを見極めることで、今後の大学教育における教育力の強化や質の向上に寄与したいと考える。

II. 研究方法

1. データ収集

調査対象者は、関西学院大学において開講された「2018年度余暇生活学演習夏期アウトドア（キャンプ実習）」参加者（32名）とした。

当該科目は、全学科目として開講され、履修基準年次は1年生である。そのため、学部、学年、性別、スポーツ経験の有無に関係なく履修が可能である。前述の通り、実習前にアイスブレイク等は実施しておらず、ほとんどの学生が初対面であり、精神的負荷の高い集団だと考えられる。

実習は、2018年8月7日～9日の3日間で行われ、調査は実習開始前（pre、学生集合時）、実習終了後（post、閉講式前）の2回、質問紙による集合調査法を用い実施した。その結果、preでは26の有効回答（有効回答率81.3%）、postでは25の有効回答（有効回答率78.1%）を得ることができ、これらを本研究の分析対象とした。

2. 「余暇生活学演習夏期アウトドア（キャンプ実習）」の概要

1) 実習の目的

本実習は、山野をフィールドとして、野外活動に必要な技術（テントの張り方、火のおこし方、ロープの結び方等）を修得するとともに、自然への理解と態度を学ぶこと、また、エレメントを用いたASE（Action Socialization Experience）プログラムを通して、本来あるべき人と人とのつながりについて理解を深めることを目的としている。なお、本目的は、実習前に行った2回の事前授業において学生に周知を行った。

2) 実習のプログラム

実習は、NOS（のせアウトドアスクール）¹⁾が、「人を育てる野外学校」として運営している吉野宮滝野外学校（奈良県吉野郡）で行われた2泊3

日の集中型授業である（主なプログラム内容については表1を参照）。

実習期間中はすべてテント泊で、食事の大半は野外炊事とした。メインプログラムは2日目のディスカバリーウォーク、3日目のエレメントを用いたHRTプログラム²⁾である。これらの活動は、キャンプの意義である「自然体験」「社会体験」「生活体験」「チャレンジ体験」（翠尾、2006）を目的としたものであり、自然への発見、目的達成のための創意工夫、仲間との協力、チーム内での自らの役割の発見、仲間の意見の尊重、食事の意味、チャレンジすることが自らの成長に与える影響等を考えることをねらいとしている。

活動グループは6～7名の男女混合5グループ体制で、学部、学年が可能な限り異なるよう振り分け、男女比の偏りが無いよう編成した。

3. 調査項目

本研究では、藤本ら（2007）によって開発されたコミュニケーションスキルを測定するための尺度であるENDCOREsを用いた。ENDCOREsは、直接的なコミュニケーションを適切に行う技能であるコミュニケーション・スキルを測定する尺度であり、対象者の範囲は明示されていないが、尺度の構成は大学生を対象に行われている（畑中、2011）。『心理測定尺度集V』（堀ら、2011）に掲載された他、多くの先行研究で用いられている尺度である（金子ら、2010；倉元ら、2012；大坪、2017；中谷ら、2015；梅村ら、2015）。24項目の質問で構成されており、「自己統制」「表現力」「解読力」「自己主張」「他者受容」「関係調整」の6つのスキルを測定することができる。前者の3スキル（自己統制、表現力、解読力）が基本スキル、後者の3スキル（自己主張、他者受容、関係調整）が対人スキルとして分類される（表2）。基本スキルよりも対人スキルの方がより高次元なコミュニケーションスキルとして位置付けられている。なお、本研究において、24項目の合計得点をコミュニケーションスキルとして扱う。測定は、「1. かなり苦手」から「7. かなり得意」までの7段階リッカート尺度を用いた。

社会人基礎力については、北島ら（2011）が作成した36項目の質問からなる尺度を使用した。

表1 プログラム内容

時間	1日目	2日目	3日目
6:30		起床 洗面	起床 洗面
7:00		〈実習7〉自然に触れ一日のスタートを切る 朝の集い	〈実習13〉野外技術の習得 テント撤収
8:00		〈実習8〉コミュニケーション & 野外技術の習得 朝食 (簡単クッキング)	〈実習14〉コミュニケーション 朝食 (簡単クッキング)
9:00	10:00 集合 アンケート記入	昼食弁当作り	〈実習15〉チームビルディング
9:30	〈実習1〉チームビルディング	〈実習9〉チームビルディング&野外プロ体験	ハート (HRT) アクティビティ
10:00	ウォークラリー (駅~学校) ↓	ディスカバリーウォークラリー	エレメント体験
11:00	野外学校 到着	フォトマップを見ながら指定速度で歩き、 様々な課題に取り組む、班対抗アクティビティ	テント撤収
11:30	開講式		
12:00	〈実習2〉野外技術の習得 昼食 アウトドアクッキング	↓ ↓ 昼食 (コース途中での弁当)	学校内清掃 ・ 荷物整理 昼食 (給食) まとめの講義 アンケート記入
13:00	〈実習3〉コミュニケーション促進 ハート (HRT) アクティビティ	↓ 班毎にゴール	14:30 閉講式
14:00	人間関係づくりの活動	シャワータイム パフォーマンスナイト準備・練習	15:00 野外学校 出発
15:00	〈実習4〉野外技術の修得 テント設営	〈実習10〉野外技術の習得 ハンドクラフト (竹はしづくり)	↓ 15:30 駅にて 解散
16:00	〈実習5〉コミュニケーション促進		
17:00	夕食 アウトドアクッキング カレーライス&DO料理	〈実習11〉コミュニケーション促進 夕食 アウトドアクッキング 大鍋 (キャンプちゃんこ鍋)	
18:00	ベーシックな野外すいさん技術の習得 & ワイルドなダッジオープン料理		
19:00	〈実習6〉野外技術の習得 ロープワーク&コンパスワーク *野外活動必須サバイバル技術の習得	〈実習12〉コミュニケーション & チームビルディング パフォーマンスナイト キャンプファイヤー形式で実施	
20:00			
21:00	シャワータイム 振り返りミーティング 明日に向けて一日のふりかえり	シャワータイム 振り返りミーティング 明日に向けて一日のふりかえり	
23:00	就寝 (テント泊)	就寝 (テント泊)	

表2 コミュニケーション・スキル尺度 ENDCORES

自己統制	自分の衝動や欲求を抑える	自己主張	会話の主導権を握って話を進める
	自分の感情をうまくコントロールする		まわりとは関係なく自分の意見や立場を明らかにする
	善悪の判断に基づいて正しい行動を選択する		納得させるために相手に柔軟に対応して話を進める
表現力	まわりの期待に応じた振る舞いをする	他者受容	自分の主張を論理的に筋道を立てて説明する
	自分の考えを言葉でうまく表現する		相手の意見や立場に共感する
	自分の気持ちをしぐさでうまく表現する		友好的な態度で相手に接する
	自分の気持ちを表情でうまく表現する		相手の意見をできるかぎり受け入れる
解読力	自分の感情や心理状態を正しく察してもらう	関係調整	相手の意見や立場を尊重する
	相手の考えを発言から正しく読み取る		人間関係を第一に考えて行動する
	相手の気持ちをしぐさから正しく読み取る		人間関係を良好な状態に維持するように心がける
	相手の気持ちを表情から正しく読み取る		意見の対立による不和に適切に対処する
	相手の感情や心理状態を敏感に感じ取る		感情的な対立による不和に適切に対処する

これは、経済産業省が提示しているプログレスシート36項目（経済産業省、2008）を参考に北島らが独自に作成したものである。社会人基礎力を構成する3要素、「アクション」「シンキング」「チームワーク」を測定すると同時に、3項目からなる12の能力要素（主体性、働きかけ力、実

行力、課題発見力、計画力、創造力、発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力）も測定できる（表3）。なお、本研究において、36項目の合計得点を社会人基礎力として扱う。測定は、「1. まったくあてはまらない」から「6. とてもよくあてはまる」までの

表3 社会人基礎力尺度

主体性	グループでの取り組みで、自分の役割は何かを見極めている
	困難なことでも自分の強みを生かして取り組んでいる
	自分の役割や課題に対して自発的・自律的に行動している
アクション	メンバーの協力を得るために、協力の必要性や目的を伝えている
	状況に応じて効果的な協力を得るために、様々な手段を活用している
	グループの目標を達成するために積極的にメンバーに働きかけている
実行力	目標達成に向かって粘り強く取り組み続けている
	とにかくやってみようとする果敢さを持って課題に取り組んでいる
	困難な状況から逃げずに目標に向かって取り組み続けている
課題発見力	目標達成のために現段階での課題を的確に把握している
	現状を正しく認識するための情報収集や分析をしている
	課題を明らかにするために、他者の意見を積極的に求めている
シンキング	目標達成までのプロセスを明確化し、実現性の高い計画を立てている
	目標達成までの計画と実際の進み具合の違いに留意している
	計画の進み具合や不測の事態に合わせて、柔軟に計画を修正している
創造力	複数のもの・考え方・技術等を組み合わせ、新しいものを作り出している
	従来の常識や発想を転換し、新しいものや解決策を作り出している
	目標達成を意識し、新しいものを生み出すためのヒントを探している
発信力	グループでの取り組みで、メンバーに情報をわかりやすく伝えている
	メンバーがどのような情報を求めているかを理解して伝えている
	話そうとすることを自分なりに理解したうえでメンバーに伝えている
傾聴力	内容の確認や質問等を行いながら、メンバーの意見を理解している
	相槌や共感等により、メンバーに話しやすい状況を作っている
	先入観や思い込みをせずに、メンバーの話の話を聞いている
柔軟性	自分の意見を持ちながら、メンバーの意見も共感を持って受け入れている
	なぜそのように考えるのか、メンバーの気持ちになって理解している
	立場の異なるメンバーの背景や事情を理解している
チームワーク	周囲から期待されている自分の役割を把握して、行動している
	自分にできること・他のメンバーができることを判断して行動している
	周囲の人間関係や忙しさを把握し、状況に配慮した行動をとっている
規律性	メンバーに迷惑をかけないように、ルールや約束・マナーを理解している
	メンバーに迷惑をかけたとき、適切な事後の対応をしている
	規律や礼儀が求められる場面では、礼節を守ったふるまいをしている
ストレスコントロール力	グループでの取り組みでストレスを感じる時、その原因について考えている
	人に相談したり、支援を受けたりして、ストレスを緩和している
	ストレスを感じても、考え方を切り替え、コントロールしている

6段階リッカート尺度を用いた。

なお、個人的属性として、性別、学年、過去のキャンプ経験の有無ならびに経験回数について尋ねた。

4. 測定尺度における信頼性

コミュニケーションスキルの測定尺度において、pre-post データそれぞれについて、クロンバツクの α 係数を用い、各尺度の信頼性を確認した。結果、6つのスキル、基本スキル（自己統制、表現力、読解力の合計値）ならびに対人スキル（自己主張、他者受容、関係調整の合計値）、コミュニケーションスキルすべてにおいて基準値 ($\alpha \geq .70$) を満たすことができた (表4)。また、フロア効果と天井効果を確認したが、いずれも確認されなかった³⁾。なお、フロア効果ならびに天井効果については、pre データのみについて確認

した。本研究では、キャンプ実習前後におけるコミュニケーションスキルの変化を検証するため、pre データにこれらの影響があると post データを正確に解釈できないと考えたためである。これらのことから、本研究におけるコミュニケーションスキル尺度は一定の信頼性が得られたものとし、分析を進めることとする。

次に、社会人基礎力についても信頼性を確認したところ、実行力の post、課題発見力の pre、post、計画力の pre、発信力の post、傾聴力の post、柔軟性の pre、post、ストレスコントロール力の pre、post の10項目において基準値 ($\alpha \geq .70$) を満たすことができなかった (表5)。しかしながら、再検討が必要だとされる基準 ($\alpha = .50$) については、10項目中8項目で上回っていること、また、アクション (主体性、働きかけ力、実行力の合計値)、シンキング (課題発見力、

表4 コミュニケーションスキル尺度における信頼性

2スキル	6スキル	質問項目	M	SD	フロア効果	天井効果	6スキルの α	2スキルの α	コミュニケーションスキルの α
自己統制		自分の衝動や欲求を抑える	4.58	.81	3.77	5.39	pre : .83 post : .82		
		自分の感情をうまくコントロールする	5.08	1.20	3.88	6.27			
		善悪の判断に基づいて正しい行動を選択する	4.50	1.10	3.43	5.57			
		まわりの期待に応じた振る舞いをする	4.46	1.45	3.01	5.91			
基本スキル	表現力	自分の考えを言葉でうまく表現する	4.12	1.24	2.87	5.36	pre : .72 post : .77	pre : .89 post : .92	
		自分の気持ちをしぐさでうまく表現する	4.85	.93	3.92	5.77			
		自分の気持ちを表情でうまく表現する	4.77	.95	3.82	5.72			
		自分の感情や心理状態を正しく察してもらう	5.08	1.20	3.88	6.27			
		相手の考えを発言から正しく読み取る	4.54	.95	3.59	5.49			
読解力		相手の気持ちをしぐさから正しく読み取る	4.96	.96	4.00	5.92	pre : .82 post : .76		
		相手の気持ちを表情から正しく読み取る	5.00	1.10	3.94	6.06			
		相手の感情や心理状態を敏感に感じ取る	4.04	.87	3.17	4.91			
		会話の主導権を握って話を進める	4.81	.94	3.87	5.75			
自己主張		まわりとは関係なく自分の意見や立場を明らかにする	4.88	1.24	3.64	6.13	pre : .86 post : .93		
		納得させるために相手に柔軟に対応して話を進める	4.42	.95	3.48	5.37			
		自分の主張を論理的に筋道を立てて説明する	5.08	1.02	4.06	6.09			
対人スキル	他者受容	相手の意見や立場に共感する	4.77	.99	3.78	5.76	pre : .78 post : .84	pre : .91 post : .94	
		反好的な態度で相手に接する	4.27	1.10	3.19	5.35			
		相手の意見をできるかぎり受け入れる	4.58	.99	3.59	5.56			
		相手の意見や立場を尊重する	4.92	.94	3.99	5.86			
関係調整		人間関係を第一に考えて行動する	4.04	1.15	2.89	5.19	pre : .80 post : .87		
		人間関係を良好な状態に維持するように心がける	3.96	1.31	2.65	5.27			
		意見の対立による不和に適切に対処する	4.69	1.16	3.53	5.85			
		感情的な対立による不和に適切に対処する	4.62	.94	3.67	5.56			

表5 社会人基礎力尺度における信頼性

3 能力要素	12 能力要素	質問項目	M	SD	フロア効果	天井効果	12 能力要素の α	3 能力要素の α	社会人基礎力の α	
アクション	主体性	グループでの取り組みで、自分の役割は何かを見極めている	4.27	.87	3.39	5.14	pre : .77 post : .86			
		困難なことでも自分の強みを生かして取り組んでいる	4.08	.98	3.10	5.05				
		自分の役割や課題に対して自発的・自律的に行動している	4.23	.82	3.42	5.05				
	働きかけ力	メンバーの協力を得るために、協力の必要性や目的を伝えている	4.35	1.13	3.22	5.48	pre : .83 post : .74	pre : .91 post : .89		
		状況に応じて効果的な協力を得るために、様々な手段を活用している	4.19	1.02	3.17	5.21				
		グループの目標を達成するために積極的にメンバーに働きかけている	4.04	1.04	3.00	5.08				
	実行力	目標達成に向かって粘り強く取り組み続けている	4.04	1.04	3.00	5.08	pre : .73 post : .68			
		とにかくやってみようとする果敢さを持って課題に取り組んでいる	4.31	1.10	3.26	5.36				
		困難な状況から逃げずに目標に向かって取り組み続けている	4.08	.94	3.14	5.01				
	課題発見力	目標達成のために現段階での課題を的確に把握している	3.88	.99	2.89	4.88	pre : .64 post : .44			
		現状を正しく認識するための情報収集や分析をしている	4.04	1.00	3.04	5.04				
		課題を明らかにするために、他者の意見を積極的に求めている	4.50	.91	3.59	5.41				
シンキング	計画力	目標達成までのプロセスを明確化し、実現性の高い計画を立てている	3.92	.82	2.87	4.98	pre : .67 post : .75	pre : .88 post : .86		
		目標達成までの計画と実際の進み具合の違いに留意している	4.12	.82	3.30	4.93				
	創造力	計画の進み具合や不測の事態に合わせて、柔軟に計画を修正している	3.92	.85	3.08	4.77				
		複数のもの・考え方・技術等を組み合わせ、新しいものを作り出している	3.85	.93	2.92	4.77				
		従来の常識や発想を転換し、新しいものや解決策を作り出している	3.81	1.10	2.75	4.87				
		目標達成を意識し、新しいものを生み出すためのヒントを探している	4.15	.88	3.27	5.03				
チームワーク	発信力	グループでの取り組みで、メンバーに情報をわかりやすく伝えている	4.15	.97	3.19	5.12	pre : .96 post : .96			
		メンバーがどのような情報を求めているかを理解して伝えている	4.23	.99	3.24	5.22				
		話そうとすることを自分なりに理解したうえでメンバーに伝えている	4.62	.85	3.76	5.47				
	傾聴力	内容の確認や質問等を行いながら、メンバーの意見を理解している	4.15	.97	3.19	5.12				pre : .86 post : .68
		相槌や共感等により、メンバーに話しやすい状況を作っている	4.62	1.02	3.59	5.64				
		先入観や思い込みをせずに、メンバーの話の聞いている	4.04	.92	3.12	4.95				
柔軟性	自分の意見を持ちながら、メンバーの意見も共感を持って受け入れている	4.35	.90	3.45	5.24	pre : .62 post : .67				
	なぜそのように考えるのか、メンバーの気持ちになって理解している	4.19	.80	3.39	4.99					
	立場の異なるメンバーの背景や事情を理解している	4.12	.91	3.21	5.02					
状況把握力	周囲から期待されている自分の役割を把握して、行動している	4.23	.99	3.24	5.22	pre : .93 post : .92				
	自分にできること・他のメンバーができることを判断して行動している	4.15	.97	3.19	5.12					
	周囲の人間関係や忙しさを把握し、状況に配慮した行動をとっている	4.27	.96	3.31	5.23					
	pre : .86 post : .72									
規律性	メンバーに迷惑をかけないように、ルールや約束・マナーを理解している	4.85	.73	4.11	5.58	pre : .76 post : .78				
	メンバーに迷惑をかけたとき、適切な事後の対応をしている	4.73	.67	4.06	5.40					
	規律や礼儀が求められる場面では、礼節を守ったふるまいをしている	4.85	.78	4.06	5.63					
ストレスコントロール力	グループでの取り組みでストレスを感じる時、その原因について考えている	4.00	1.30	2.70	5.30	pre : .64 post : .13				
	人に相談したり、支援を受けたりして、ストレスを緩和している	4.12	.99	3.12	5.11					
	ストレスを感じても、考え方を切り替え、コントロールしている	4.27	.78	3.49	5.05					

計画力、創造力の合計値)、チームワーク(発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力の合計値)の3要素や社会人基礎力の α 係数については基準値を上回っていることから、一定の信頼性を得ることができたと判断し、分析を進めることとした。なお、コミュニケーションスキルと同様に、フロア効果と天井効果を確認したが、いずれも認められなかった。

5. 分析方法

データ分析は、コミュニケーションスキル、ならびに社会人基礎力について、実習前後の平均値を比較した(独立したサンプルのt検定)。次に、コミュニケーションスキルについては、6つのスキルそれぞれについて実習前後における平均値を比較し、さらに基本スキル、対人スキルについても同様に比較した。また、社会人基礎力については、アクション、シンキング、チームワークの3能力要素ならびに12の能力要素においても同様の分析を行うことで、より詳細にキャンプ実習の効果を検証することとした。なお、有意性については、有意水準5%で統計学的有意と判断し、データ分析にはSPSS Statistics 21を用いた。

Ⅲ. 結果と考察

1. 調査対象者の個人的属性

調査対象者の個人的属性を表6に示した(%)

表6 対象者の個人的属性

性別	男性	53.8
	女性	46.2
学年	1年	19.2
	2年	57.7
	3年	7.7
	4年	15.4
	過去のキャンプ経験	あり
	なし	23.1
過去のキャンプ経験回数 (平均: 4.9回)	1回	38.5
	2回~3回	19.2
	4回~5回	15.4
	6回~9回	7.7
	10回以上	19.2

(%)

段階における26名の個人的属性)。女性よりも男性の方が若干多く、学年は6割近くが2年生であるが、1年生から4年生まですべての学年を含んでいる。また、8割近くの学生がキャンプ経験を持ち、経験回数は1回が最も多い(38.5%)が、2回~3回が19.2%、4回~5回が15.4%、6回~9回が7.7%、10回以上が19.2%と多岐に渡る。これらのことから、本研究の調査対象は、性別、学年、キャンプ経験ともに大きな偏りない大学生であるといえる。

2. 実習前後におけるコミュニケーションスキルの変化

コミュニケーションスキルを測定する全24項目の合計得点の平均ならびに標準偏差を算出し、t検定を行った。分析の結果、実習前後において、1%水準で有意な差が認められ、実習後の方が有意に高い結果となった(表7)。

次に、基本スキルと対人スキルの実習前後における変化についても同様の分析を行った結果、両スキル共に有意な差が認められ、共に実習後の方が高い結果となった(表8)。

6つのスキルにおいても同様の分析を行ったところ、自己統制を除く5つのスキルにおいて、有意な差が認められ、実習後の方が高い結果となった(表9)。

最後に、甲斐ら(2015)の研究を参考に、藤本

表7 実習前後におけるコミュニケーションスキルの変化

		M	SD	p
コミュニケーションスキル	pre (n=26)	111.00	17.39	**
	post (n=25)	126.56	21.24	
**p<.01				

表8 実習前後における2スキルとの変化

		M	SD	p
基本スキル	pre (n=26)	55.96	8.70	*
	post (n=25)	62.80	10.95	
対人スキル	pre (n=26)	55.04	9.14	**
	post (n=25)	63.76	10.64	

*p<.05 **p<.01

(2007)が実施した大学生の調査におけるコミュニケーションスキルを基準値と考え、本研究で得られた pre-post のデータと比較を行った (1 ワンパルの t 検定)。まず、pre データと基準値との比較結果であるが、自己統制において有意差が認められず、解読力、他者受容、関係調整の3スキルでは有意に基準値の方が高い結果となった (図1)。そして、post データとの比較の結果、pre 段階では基準値の方が有意に高い状態であった解読力、他者受容、関係調整において、有意性が認められなくなっていた。すなわち、キャンプ実習での体験を通し、これらのスキルが基準値レベルまで引き上がったこととなる。pre 段階で基準値よりも有意に高い値を示した表現力、自己主張は post 段階でも有意性を維持していた。なお、pre-

表9 実習前後における6スキルごとの変化

		M	SD	p
自己統制	pre (n=26)	18.62	3.75	n.s
	post (n=25)	20.28	4.50	
表現力	pre (n=26)	18.81	3.20	*
	post (n=25)	21.16	3.69	
解読力	pre (n=26)	18.54	3.10	**
	post (n=25)	21.36	3.67	
自己主張	pre (n=26)	19.19	3.51	*
	post (n=25)	21.64	4.25	
他者受容	pre (n=26)	18.54	3.11	**
	post (n=25)	21.40	3.46	
関係調整	pre (n=26)	17.31	3.63	**
	post (n=25)	20.72	4.22	

*p<.05 **p<.01

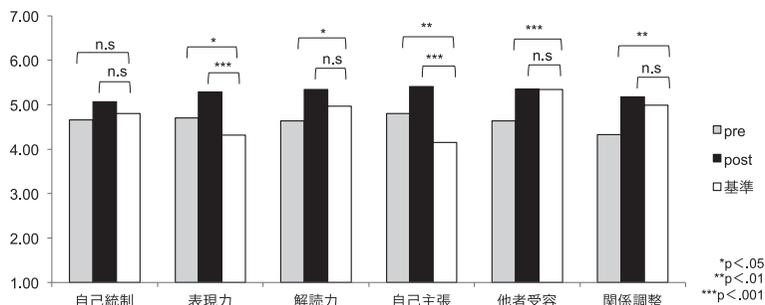


図1 コミュニケーションスキルにおける基準値との比較結果

post 間の比較結果は前述しているため、図上には反映していない。

以上の結果から、キャンプ実習での体験は、実習前後でコミュニケーションスキルを高める効果があることが示唆された。

3. 実習前後における社会人基礎力の変化

社会人基礎力を測定する全36項目の合計得点の平均ならびに標準偏差を算出し、t 検定を行った。分析の結果、実習前後において1%水準で有意な差が認められ、実習後の方が高い結果となった (表10)。

次に、アクション、シンキング、チームワークの実習前後における変化についても分析を行った。結果、アクションならびにチームワークにおいて1%水準、シンキングにおいて0.1%水準でそれぞれ有意な差が認められ、実習後の方が高い結果となった (表11)。

12能力要素においても分析を行ったところ、規律性を除く11の要素において、有意な差が認められ、すべて実習後の方が高い結果となった (表12)。規律性のみ有意差が認められなかったが、pre 段階の平均得点は12要素の中で最も高い14.42を示し、post においても最も高い15.24を示した。pre データにおいて、天井効果は認められなかったものの、すでにそれに近い状態にあ

表10 実習前後における社会人基礎力の変化

	M	SD	p
社会人基礎力	pre (n=26)	151.69	22.68
	post (n=25)	174.64	21.80

**p<.01

表 11 実習前後における 3 要素ごとの変化

		M	SD	p
アクション	pre (n=26)	37.58	6.72	**
	post (n=25)	43.64	6.54	
シンキング	pre (n=26)	36.19	6.05	***
	post (n=25)	43.08	5.80	
チームワーク	pre (n=26)	77.92	11.35	**
	post (n=25)	87.92	10.59	

p<.01 *p<.001

り、そのことが影響している可能性が考えられる。

山田ら (2017) の研究では、半期を通じてチームでボランティア活動を行ってきた学生 (一般学生) とラーニングコモンズにおける学生スタッフの社会人基礎力を比較している。そこで、山田ら (2017) の研究で示された一般学生と学生スタッフの社会人基礎力を基準値と考え、本研究で得られた pre-post データと比較した (1 ワンプルの t 検定)。

まず、一般学生との比較結果であるが、図 2 に示した通り、pre データと一般学生との間には、働きかけ力、計画力、創造力、発信力において有意差が認められたものの (全て pre データの方が高い)、他の 8 要素には有意性は認められなかった。しかしながら、post データとの比較では、全 12 要素において有意差が認められ、全て post データの方が高い結果となった。つまり、実習前は、基準値と同等レベルであった要素が 8 つ存在したものの、実習を通し、全ての要素において基準値を上回るレベルまで引き上がったことが分か

表 12 実習前後における 12 要素ごとの変化

		M	SD	p
主体性	pre (n=26)	12.58	2.21	**
	post (n=25)	14.72	2.26	
働きかけ力	pre (n=26)	12.58	2.76	*
	post (n=25)	14.44	2.60	
実行力	pre (n=26)	12.42	2.44	**
	post (n=25)	14.48	2.40	
課題発見力	pre (n=26)	12.42	2.21	***
	post (n=25)	14.56	1.78	
計画力	pre (n=26)	11.96	2.13	**
	post (n=25)	13.88	2.44	
創造力	pre (n=26)	11.81	2.35	***
	post (n=25)	14.64	2.45	
発信力	pre (n=26)	13.00	2.48	*
	post (n=25)	14.64	1.87	
傾聴力	pre (n=26)	12.81	2.58	*
	post (n=25)	14.20	2.29	
柔軟性	pre (n=26)	12.65	1.96	***
	post (n=25)	14.84	1.97	
情況把握力	pre (n=26)	12.65	2.58	**
	post (n=25)	14.52	2.18	
規律性	pre (n=26)	14.42	1.79	n.s
	post (n=25)	15.24	2.13	
ストレスコントロール力	pre (n=26)	12.38	2.38	**
	post (n=25)	14.26	1.90	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

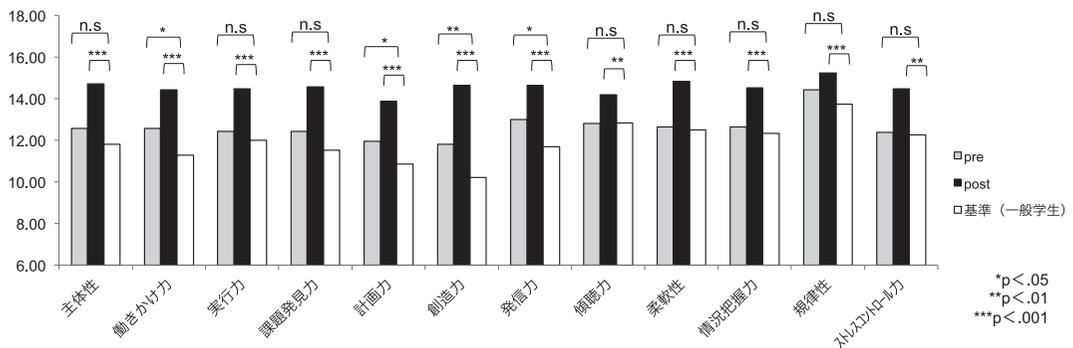


図 2 社会人基礎力における基準値 (一般学生) との比較結果

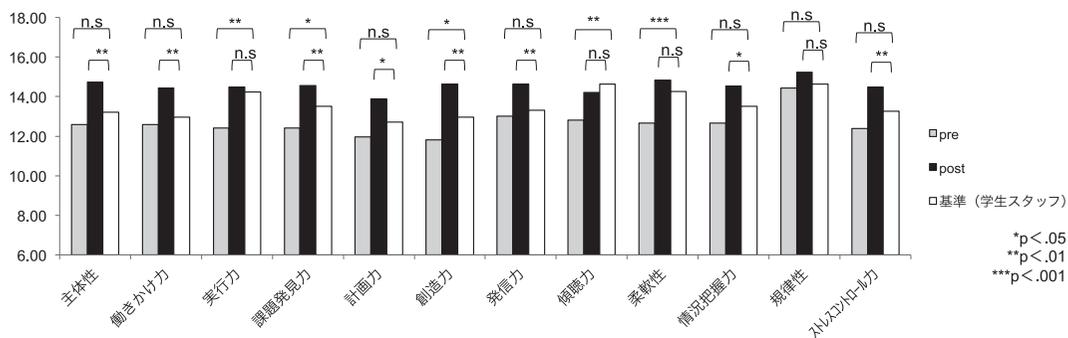


図3 社会人基礎力における基準値（学生スタッフ）との比較結果

る。

さらに、学生スタッフとの比較結果であるが、図3に示した通り、pre 段階では7要素において有意差がなく、有意差が認められた要素（実行力、課題発見力、創造力、傾聴力、柔軟性）も全て基準値の方が高い結果となった。しかしながら、post データとの比較結果を見ると、有意性のなかった7要素の内、6要素で有意差が認められ（主体性、働きかけ力、計画力、発信力、状況把握力、ストレスコントロール力）、全て post データが基準値を上回っていた。また、pre 段階では基準値が有意に上回っていた5要素に関しても、3要素において有意差なし（実行力、傾聴力、柔軟性）、2要素（課題発見力、創造力）において有意に post データの方が高い結果となった。これらのことから、pre 段階では、基準値と同様もしくは低いレベルにあった社会人基礎力が、post 段階では、基準値を上回るレベルにまで引き上がったことが分かる。

以上の結果より、キャンプ実習での体験は、実習前後で社会人基礎力を高める効果があり、一部の能力要素においては、ボランティア活動に取り組む学生やラーニングコモンズの活動を行う学生の値を上回るほどの向上が期待できることが明らかとなった。

先行研究において、インターンシップや就業体験、社会での就業等による社会人基礎力の向上が示されているが、本研究で対象となった2泊3日のキャンプ実習においても同様の効果を示すことができた。この結果は、大学教育における社会人基礎力育成手段の一つとしてキャンプ実習の有効性、必要性を根拠づけることができた点で意味の

あることだと考える。

4. 考察

今回、研究対象となったキャンプ実習は、オートキャンプやバーベキューに代表されるレクリエーションを主目的としたレジャー活動ではなく、個人の成長や体験、教育などを目的とする野外教育として実施されたものである。活動はすべてグループ単位で行い、移動は原則徒歩、スマートフォン等の電子機器類の使用は緊急時対応のみとし、普段の便利な日常生活を持ち込まない非日常的な空間がその舞台である。その中で、大学生であることを考慮し、各グループに与えられる情報は各プログラムのルールと達成目標のみである。情報は限られ、便利な道具や機器もない。このような条件下で求められるのは、目標達成に向け、一人ひとりがグループの中での役割を考え、主体的に行動することである。何が必要で、何が課題なのか、自分の役割は何なのか、何を利用すべきなのか等を考え、行動に移していく。また、自分一人だけの努力では目標の達成は成しえない。そこにはグループの力が必要である。メンバー全員が達成のための考えやアイデアを共有し、それにチャレンジしていく。考えを共有するためには、積極的に自らの意見を伝えるだけでなく、相手の意見に耳を傾けることも重要である。これらの経験を積み重ねることが出来た結果、アクション、シンキング、チームワークという社会人基礎力を構成する要素や主体性、働きかけ力、実行力等の細分化された能力要素にも効果が得られたのであろう。

コミュニケーションスキルについても同様で、

グループでの目標達成には、自らの意見を主張することも必要であるが、正確に相手へ伝えるための柔軟な表現や表情も不可欠である。加えて、相手を尊重し、受け入れ、相手の気持ちを表情やしぐさから感じ取ることも必要となる。衝動や感情を抑えきれない表現は、チームワークを乱し、良好な人間関係の構築を妨げる。感情をコントロールし、まわりの期待に応じた振る舞いをすることで関係調整することが求められる。これらの経験の積み重ねが、コミュニケーションスキルやこれを構成する種々のスキル向上へとつながったのだろう。

実習中に行った「振り返り」の時間の中で、「一人では達成できない課題もグループであれば達成できる」、「仲間の大切さを学んだ」、「メンバー全員が相手のことを考えて行動できている」、「社会人になってからでも応用できる能力を修得できた」、「チャレンジに無駄などないことを学んだ」等の発言が見受けられた。これらの発言からも、キャンプ実習がコミュニケーションスキルや社会人基礎力の向上に寄与できることが読み取れよう。

築山ら（2008）は、経済産業省の「社会人基礎力に関する緊急調査」内の参考資料（経済産業省、2006）を基に、主体性、実行力、課題発見力の向上が大学教育に求められる育成課題であると指摘している。本研究では、pre-post 間での向上だけでなく、山田ら（2017）の研究を参考にした基準値との比較結果においても、これら能力の向上が認められた。この結果は、社会人基礎力向上に向けたキャンプ実習の意義や教育効果を示す一資料となったといえよう。また、2泊3日という短期間の実習においても、効果が期待できることを示した点が本研究の新規性であると考えられる。

IV. まとめ

本研究の目的は、大学体育授業における2泊3日でのキャンプ実習が、大学生のコミュニケーションスキルならびに社会人基礎力に与える効果を明らかにすることであった。分析の結果、以下のことが明らかになった。

- 2泊3日で行うキャンプ実習は、コミュニケー

ションスキルならびに社会人基礎力を向上させる効果がある。

- キャンプ実習は、大学生におけるコミュニケーションスキルならびに社会人基礎力を育成する手段となる。

ただし、本研究にはいくつかの課題が残されている。

1つ目は測定尺度に関する課題である。本研究で使用した社会人基礎力測定尺度は、北島ら（2011）が作成したものであったが、信頼性において基準値を下回った要素が複数確認された。再検討が必要だとされる基準を多くが満たしていたため分析を継続したものの、十分な信頼性が確保できていたとは言い難い。他の尺度を用い、同様の調査を行うことで再現性を確認する必要があるだろう。

2つ目は、キャンプ終了後の効果継続に関する検証である。本研究の目的はキャンプ実習がコミュニケーションスキル、社会人基礎力の変化に与える効果を明らかにすることではあるが、重要なことは、その効果がその後の日常生活へ一般化されるかどうかである。実習前後での向上が確認されたとしても、その効果が直ちに失われるようでは、効果とは言い難い。その点において、本研究は実習前後だけのデータ収集にとどまってしまった。2泊3日という短期間での実習における継続効果はどの程度なのか、日常での一般化は可能なのか等を検証するために、実習後1ヵ月や2ヵ月のデータ収集を試み、検証していく必要があるだろう。

3つ目は、対照群との比較である。実習の効果を客観的に評価するためには、実習参加者の自己評価だけでは不十分であり、基準となる対照群との比較が必要である。本研究では、コミュニケーションスキルならびに社会人基礎力ともに、先行研究のデータと比較することで客観性の担保を試みた。しかしながら、本来であれば本研究の中で、個人的属性が類似した対照群を設定し、同時に同調査を実施することで一次データ間での比較検証が求められる。今後の大きな課題として受け止めたい。

最後に、個人的属性の違いによる効果検証であ

る。本研究では、性別、学年、キャンプ経験の有無関係なく、pre-post間で各スキル・能力の比較を行ったが、今後は、属性の違いによる効果の違いを検証する必要があると考える。18歳人口の減少に伴い、各大学は教育の多様性をアピールすると同時に、質の高い教育により、学生の満足度を高めることが求められる。個人的属性における効果の違いを明らかにし、それに基づいた実習内容（男女比や学年の固定化、キャンプ未経験者限定など）を検討することにより、キャンプ実習の効果の最大化、ならびに特色ある教育カリキュラムの提供へとつながるだろう。

大学の教育改革が叫ばれる中、ますます学生自らが能動的に学ぶ学習現場が目まぐるしく変わっていくだろう。本研究の対象となったキャンプ実習も学生自らが能動的、主体的に学ぶ体験学習であり、大学生の汎用的能力の育成に貢献しうるものである。多くの大学で教育カリキュラムへ採用されることを期待するとともに、さらなる効果の検証、蓄積が望まれる。

注

- 1) 商標登録第 5087811 号。
- 2) Human Relation Training。NOS が半世紀に渡り蓄積してきたアウトドアプログラムの運営手法に、イニシアティブゲームの要素を加えたオリジナルプログラム。一つひとつのアクティビティを通して、お互いを尊重し、協力し合いながら課題を達成していくことで、豊かな人間関係の築き方を学ぶ。商標登録第 5087810 号。
- 3) 「平均値 - 標準偏差」が最小値以下のものはフロア効果、「平均値 + 標準偏差」が最大値以上のものは天井効果が疑われる。

参考文献

青木康太郎・粥川道子・杉岡品子 (2012) 「キャンプ体験が大学生の社会人基礎力の育成に及ぼす効果に関する研究」『北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要』3, 27-39.

藤本学・大坊郁夫 (2007) 「コミュニケーション・スキルに関する諸要因の階層構造への統合の試み」『パーソナリティ研究』第 15 巻, 第 3 号, 347-361.

深津達也 (2012) 「スポーツ学部系大学生におけるインターンシップ実習の成果と課題 事前研修における『社会人基礎力』の変化」『研究紀要』9, 73-82.

一宮厚・馬場園明・福盛英明・峰松修 (2003) 「大学新入生の精神状態の変化 - 最近 14 年間質問票による調査 -」『精神医学』45(9), 959-966.

石道峰典・西脇雅人・中村友浩 (2015) 「選択科目の体育実技授業を履修する大学生の社会人基礎力の特徴について」『大学体育研究』37, 1-10.

石道峰典・西脇雅人・中村友浩 (2016) 「体育実技授業における社会人基礎力育成を意図した介入効果の検証」『大学体育学』13, 26-34.

花田道子・富山浩三・西田順一 (2005) 「完全学校週 5 日制に対応したスポーツ・野外活動経験が生きる力に及ぼす影響について」『九州女子大学紀要』41(4), 11-22.

橋本公雄 (2009) 「『健康・スポーツ科学演習』の授業で人間関係は醸成できるのか?」『大学体育学』6(1), 23-31.

畑中美穂 (2011) 「コミュニケーション・スキル尺度 ENDCOREs」堀洋道 (監修) 『心理測定尺度集 V 個人から社会へ (自己・対人関係・価値観)』, 272-277, サイエンス社.

引原有輝・森田啓・若林斉・金田晃一 (2016) 「実技種目の異なる大学体育授業が社会人基礎力の育成に及ぼす影響」『大学体育学』13, 16-25.

堀洋道 (監修)・吉田富二雄・宮本聡介 (編) (2011) 『心理測定尺度集 V 個人から社会へ (自己・対人関係・価値観)』, 272-277, サイエンス社.

株式会社アイ・イー・シー「経済産業省経済産業政策局、社会人基礎力に関する研究会、座長諏訪康弘教授に訊く」, 2018 年 8 月 29 日アクセス,
<https://www.iec.co.jp/sk1011/>

株式会社進研アド (2007) 「『社会人基礎力』の育成を通して大学の教育力を向上させる」『Between 2007 年秋号』, 2018 年 8 月 30 日アクセス,
https://berd.benesse.jp/berd/center/open/dai/between/2007/10/01toku_23.html

影山義光・布目靖則 (2001) 「大学キャンプ授業の参加学生の自己概念と孤独感の変化」『野外教育研究』5(1), 49-59.

甲斐知彦・関口陽介・秋山和子 (2015) 「キャンプリーダーの視点から見た就業体験が学生に及ぼす影響 - キッザニア甲子園での就業体験から得られたもの -」『身体運動文化論叢』第 14 号, 29-39.

金子和弘・今井有里紗・加藤孝央・城佳子 (2010) 「アサーション行動尺度における信頼性・妥当性の検討」『生活科学研究』32, 57-66.

北島洋子・細田泰子・星和美 (2011) 「看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討」

- 『大阪府立大学看護学部紀要』17(1), 13-23.
- 倉元俊輝・大坊郁夫 (2012) 「大学生のコミュニケーション・スキルの特徴に関する研究 ENDCOREs を用いた検討」『対人社会心理学研究』12, 149-156.
- 経済産業省 (2006) 「社会人基礎力に関する緊急調査、(参考) 求める人材像と若者の認識とのギャップ」, 2019年3月6日アクセス,
<http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/286890/www.meti.go.jp/press/20060418005/shakaijin,kisoryokuchousa-set.pdf>
- 経済産業省 「『社会人基礎力』育成のスズメ〜社会人基礎力育成プログラムの普及を目指して〜」, 2020年1月8日アクセス,
<http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/286890/www.meti.go.jp/press/20070517001/kisoryoku-reference.pdf>
- 経済産業省編著 (2008) 『今日から始める社会人基礎力の育成と評価、角川学芸出版』, 東京.
- 厚生労働省 (2013) 「平成25年若年者雇用実態調査の概況、これまでの就業状況」, 2018年8月29日アクセス,
https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/4-21c-jyakunen-koyou-h25_07.pdf
- 厚生労働省 (2017) 「新規学卒者の離職状況、新規学卒就職者の学歴別就職後3年以内離職率の推移」, 2018年8月29日アクセス,
<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11650000-Shokugyoutaiteikyokuhakenyukiroudoutaisakubu/0000177659.pdf>
- 小柳晴生 (1996) 「大学生の不登校 生き方の変更の場として大額を利用する学生たち」『心の科学』69, 33-38.
- 文部科学省 (2000) 「大学における学生生活の充実方策について (報告) - 学生の立場に立った大学づくりを目指して -」, 大学における学生生活の充実に関する調査研究会.
- 文部科学省 (2014) 「学生の中途退学や休学等の状況について」, 2018年8月29日アクセス,
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/_icsFiles/afieldfile/2014/10/08/1352425_01.pdf
- 松元泰儀 (1996) 「人間関係のつまずきと病理」 齊藤誠一 (編) 『人間関係の発達心理学4 青年期の人間関係』, 135-167、培風館、東京.
- 真鍋和博 (2010) 「インターンシップタイプによる基礎力向上効果と就職活動への影響」『インターンシップ研究年報』13, 9-17.
- 中川もも・岡村泰斗・黒澤毅・荒木恵理・米山絵理 (2005) 「長期・短期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす効果」『野外教育研究』8(2), 31-43.
- 中谷章子・井田政則 (2015) 「看護コミュニケーション尺度作成の試み - 看護スタッフおよび患者・家族に対する看護師のコミュニケーション -」『立正大学心理学研究年報』(6), 53-66.
- 西田順一・橋本公雄 (2009) 「初年次学生の社会的スキル改善・向上を意図した大学体育実技の心理社会的有効性」『大学体育学』6, 91-99.
- 野口和行・須田芳正・村松憲・村山光義・加藤大仁 (2013) 「学生の社会的スキル向上を目指した体育実技実践の試み」『体育研究所紀要』52(1), 11-20.
- 野口和行・村山光義・村松憲・板垣悦子・東海林祐子 (2015) 「体育実技受講学生の社会的スキル及び自己効力感の変容に関する検討 - 授業形態の違いによる比較 -」『体育研究所紀要』54(1), 9-16.
- 織田恵輔・舞寿之・辻慎太郎・松尾貴司・織田修輔 (2017) 「野外活動が子どもの自己効力感に及ぼす影響について」『プール学院大学研究紀要』第58号, 265-274.
- 大坪岳 (2017) 「青年期のコミュニケーション・スキルとソーシャル・サポートがレジリエンスに及ぼす影響」『追手門学院大学心理学論集』25, 13-25.
- 渋谷崇行・小泉昌幸 (2003) 「スポーツ活動を素材とした人間関係トレーニングの実施とその効果」『新潟工科大学研究紀要』8, 117-124.
- 杉山佳生 (2008) 「スポーツ実践授業におけるコミュニケーションスキル向上の可能性」『大学体育学』5, 3-11.
- 翠尾由美 (2006) 「キャンプの意義と目的」社団法人日本キャンプ協会編『キャンプ指導者入門』, 4-9、日本キャンプ協会、東京.
- 橋直隆・平野吉直・関根章文 (2003) 「長期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす影響」『野外教育研究』6(2), 45-56.
- 高山昌子 (2009) 「大学生の組織キャンプの効果に関する一考察」『太成学院大学紀要』11, 85-95.
- 谷井淳一・藤原恵美 (2001) 「小・中学生用自然体験効果測定尺度の開発」『野外教育研究』5(1), 39-47.
- 津田将行・前田吉広 (2016) 「大学生のインターンシップ参加が社会人基礎力に及ぼす効果に関する研究」『大学教育論叢』第2号, 103-110.
- 築山泰典・神野賢治・田中忠道 (2008) 「大学キャンプ実習が『社会人基礎力』に及ぼす有効性の検討」『福岡大学スポーツ科学研究』39(1), 13-26.
- 東海林祐子・永野智久・加藤貴昭・佐々木三男・島本好平 (2012) 「大学体育授業がライフスキルの獲得に与える影響 単元前の学生のスキルレベルに着

- 目して』『Keio SFC journal』12(2), 89-108.
- 徳田真彦・粥川道子・安原政志・佐藤悦子（2017）「自然体験活動が大学生の社会人基礎力に及ぼす影響」『北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要』第8巻, 127-139.
- 梅村慶嗣・斎藤嘉孝（2015）「キャリア教育においてクラスサイズが協同学習の効果に及ぼす影響の検討」『生涯学習とキャリアデザイン』13(1), 93-101.
- 山田亮・粥川道子（2010）「大学キャンプ実習における参加者の信頼感および自己開示に及ぼす影響」『北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要』1, 83-91.
- 山田貴子・金山健一（2017）「ラーニングコモンズの活動が大学生の社会人基礎力に与える効果の検討」『神戸親和女子大学大学院研究紀要』第13号, 63-74.

Research on the Effects of Holding Camps on University Student Communication Skills and Fundamental Competencies for Working Persons

Naoya Hayashi*¹, Hironobu Sato*², Jun Mizohata*¹

ABSTRACT

The objective of this research was to elucidate the effect of holding a 2-night, 3-day camp for a university physical education class on changes in university student communication skills and fundamental competencies for working persons. There were 26 subjects prior to holding the camp, and 25 subjects remaining after the camp. The results of this analysis led to the following conclusions.

- The holding of a 2-night, 3-day camp has an effect on the improvement of communication skills and fundamental competencies for working persons.
- Holding camps can be a means to help foster communication skills and fundamental competencies for working persons among university students.

The camp serves as a venue where students learn actively and autonomously through hands-on experience, and can contribute to nurturing general competencies among the university students. The wide adoption of this camp method into many university curricula can be expected, and more verification and recording of the effects of this camp method are needed.

Key words : outdoor education, communication skills, fundamental competencies for working persons

* 1 Professor, School of Human Welfare Studies, Kwansai Gakuin University

* 2 Associate Professor, School of Human Welfare Studies, Kwansai Gakuin University